
コラボ企画 真剣で私に恋しなさい ~ 男 ~

兵隊

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「ラボ企画 真剣で私に恋しなさい」 男

【Zコード】

N7637Q

【作者名】 兵隊

【あらすじ】

もし、あの世界が普通の世界で、その住人達も普通（？）だったら。と言ったパラレルワールド。
力オスでスペクタクルな“普通”の世界の住人たちの日常が幕を開ける。

参加作品

真剣で王に恋しなさい

真剣でアイツに恋してる！

闇に咲く花たち

真剣で私に恋しなさい～～暦の五月～

参加作品随時募集しております。気軽に♪参加ください！
更新は不定期で♪ざこます

始まるにあたって

いつも初めての方ははじめまして、『存知の方はおはようばんちは。兵隊です。

まず初めに、私のような若輩者が書く小説を開いて下さつて誠にありがとうございます。

題名でお気づきかもしませんが、この小説の内容は『真剣で私は恋しなさい!』をベースとした学園コラボとなつております。

そこで、原作『真剣で私は恋しなさい!』と違う注意点を。

- ・ 気と言つ概念がない
- ・ 九鬼家もキリヤカンパニーも普通の大企業
- ・ 不死川家は原作のような権力を持つていない。
- ・ 川神などといった武道家達も、本編のような強さではなく、普通の強い武道家レベル。
- ・ あるキャラが激しくキャラ崩壊 ここに重要

などです。

簡単にいえば、『真剣で私は恋しなさい!』が気などと書いた超常現象が無く普通の世界だつたら

かつ、『その普通の世界の中にオリ主たちが学園生活を送ついたら』というのが此度のコラボ内容となつてあります。いわゆるパラレルといつものです。

原作を改悪しそぎだろ。と思われる方もいらっしゃると思いますが、自分もなんとか皆さんが楽しめるような作品を作つてこいつと

心がけるので、ぜひかばんよりお願いします。

最後になりますが、自分のような若輩ものが書くコラボにご協力して下さった作者様方。なにびし、自分のような若輩者が書く作品を開いてくださった皆々様にお礼を申し上げたいと思います。

楽しんでみてください、幸いです。

けたたましい音が部屋中に鳴り響いた。

それはケータイのアラーム。朝であることを知らせる物だった。

「うぐう……」

た。

そして、手を縦横無尽にまさぐる。どうやらケータイのアラームを止めようとして、ケータイを探しているようだった。

しかし今の少年はうつ伏せで寝ているためか、ケータイがどうに有るかまったく分かつていない。

だからどううか、アラームが鳴つてから30秒は過ぎているが未だにケータイのアラームを止めれないでいる。

「……あー、ウルサイ

そこでようやく少年は顔を上げた。

その髪の毛は黄金。そして、眠たそうにしている双眸の瞳は紅色。

中学生ぐらじの幼さを残した顔つき。

何はともあれ、少年は寝ぼけ眼を擦りながら、ケータイのアラームを消して今の時刻を見る。

今の時刻は7時30分。そもそも学校へ行く用意をしなければ間に合いそうにない時間だ。

だが少年は慌てることなく、ケータイの電源を切り、

「あと5時間は眠れるな……」

そういうと、布団にまた潜り始める。

実際にはそんなに眠れない。少年の通う川神学園は8時50分頃には出席をとり、ホームルームが始まってしまう。8時に準備がすべて完了し学園に通うとしても、徒歩で30分はかかるのだ。

せいで元気だと、少年が通っている方法は徒歩。

そう考えると、そろそろ起きないとまずい時刻だ。

だが少年は眠たかったのか、もうすでに寝息を漏らしている。起

「おうおーー、そろそろ起きないと遅刻するわよーー。」
れる気配すらない状況だ。

「おうおーー、そろそろ起きないと遅刻するわよーー。」
れる気配すらない状況だ。

女性の声が聞こえてくる。

少年 霧夜王貴はその声に反応することなく、スヤスヤと
マイペースに寝息を囁えている。起きる気配など蹠無だ。

しばらくして、ドタドタ！ といった音が聞こえてきた。
それはまるで階段を駆け上がるような、つまりはそんな音だ。

その音が無くなつたと思つたら、次はバン！ と言つた扉が開く
音した。その音の出所は王貴の部屋の扉から聞こえてきた。つまり
は、誰かが王貴の部屋に入つてきたということに繋がる。

入つてきた人物は女性だつた。

川神学園の白を強調した女子制服に身を包んだ女性。
黒髪で、髪型は左右に団子を作りそこからツインテールの要領で
髪を垂らすかのような髪型だ。

その女性の名前は 不死川心。

隣に住む王貴の幼馴染の名前だ。

不死川心の普段の表情は可憐と書つてもいいこのレベルだ。
それも“普段”といつ話。

今はどちらかといつと顔は吊り上がり、怒っているといった表情をしてこな。

「おー、こいかげんに起きあわのじや」

先ほど女性の声とは違う声質。
どうやら先ほど女性は心の声ではなくことなりだ。

「王貴ー、おーしゃーるーのーじやーーー。」

今度は大声。先ほどとは桁外れの音量だ。
だがそれでも、王貴の睡眠を妨げる域には達していない。

「おーしゃーーー、おーしゃーるーのーじやあああー。」

再度大声。しかも先ほどの大声とはレベルが違う音量。そして枕元で叫ぶ。これはもはや騒音レベル。これで寝ている奴はありえないとも言える。

しかし王貴はそれでも起きない。あまつせや身をよじり寝がえりをうちながら

「うるせー。みみもとでさばでなーい。あと8じかんはねるぞー^{オレ}王はー」

正にテンプレ通り。いや、テンプレよりも長い時間帯を言いながらこの霧夜王貴は眠る。

寝坊介何て言う問題ではない。低血圧にもほどがある行動だ。いや、厳密にいえば低血圧は関係なく、夜中まで起きていた事が原因としている行動だ。

王貴を起こしに来た心はそのままプルプルと体を震わせる。

そして、ため息を漏らし始める。怒氣を吐き出すように、溜めこんでいた何もかもを吐き出すように。

そして寝ている王貴を睨みつけ、拳握り締め大きく振りかぶり始める。その構えに防御の概念など無い。攻撃に特化、いや攻撃オン

リーといつかのような構えのまま、

「いい加減に起きよオオオオオオオオオオ！」

「ギヤボオオオオオオオオオオオツツ！？！」

拳を王貴へと振り下ろす。

具体的に言うと腹部に。鳩尾ともいえる場所に、心の体重が乗つた一撃が放たれる。その一撃は強烈の一文字。振り下ろされたその一撃は王貴の体はくの字に折り、変な奇声を上げるほどだ。

そうして、霧夜王貴の朝が始める。

とても、清々しい朝とは言えないモノではあったが。

「ぬう……、まだ腹部が痛む……」

「ふん、お前の自業自得なのじやー！」

そう言つて、二人は二階にある王貴の部屋から下りる。

王貴は顔をゆがめながら腹部を摩り、心は不機嫌そうに腕を組んでいる。王貴の恰好は少し前に来ていた寝巻ではなく、川神学園の男子生徒の制服に身を包んでいる。

二人は一階に下りると、ある場所へ続く部屋のドアの前に立ち、ドアを開ける。

ここで言つが、霧夜王貴の家は普通の一軒家だ。

別に豪邸と言える広さでも無く、武家屋敷のような風情のある家でも無い。本当に普通の一軒家に住んでいる。

この家に住んでいるのは彼だけではない。彼の義姉である霧夜エリカ。彼の義母にあたるエリカの母。彼の実母にあたる王貴の母。そして、キリヤカンパーー総帥であるエリカと王貴の父。計5人がこの“普通の家”に住んでいる。

さらに言つと、彼らの父はキリヤカンパーーの総帥。つまりは金持ちの部類に入る人種だ。その人間が“普通の家”に住んでいるのはおかしいともいえる。普通の世間一般的なイメージでいえば、金持ち=豪邸に住んでいるイメージと言つてもいい。

だが、あえて彼らは“普通の一般的な家”に住居を構えている。

それもこれも原因は、王貴の母の希望だ。

家を建てるときに彼女は「豪邸より普通の家に住みたい」という希望をしていた。

その希望にエリカの母もエリカと王貴の父も反対はなかつた。いやむしろノリノリだつた。故に、彼らは金持ちだと言つても関わらず“普通の一般的な家”に住んでいるのだ。

王貴と心がドアを開ける

一人が訪れたのは霧夜邸の居間。畳12畳の世間一般的な居間がそこに広がっていた。

その居間のソファーに一人の女性が腰かけていた。

片手には「コーヒー カップ。もう片方の手には新聞紙が握られてい
る。

「あら、今日は早くに起きてきたのね？」

視線を新聞紙からずらし、王貴と心へと向ける。

その女性の名前は霧夜エリカ。王貴の義姉にあたる女性だ。

その言葉に王貴は侵害だ。というかのよつて顔を顰めて、

「待て姉上。その言葉では、王^{オレ}がいつも起きるのが遅い。と聞こえ
るではないか。撤回せよ！」

「事実でしょうが。毎日毎日遅刻ギリギリ。心がいなかつたら、ア
ンタ終わってるわよ？」

エリカの言葉に、王貴はますます顔を顰めていく。
それから心をチラ見してから、横にいる彼女を指さして、

「このよつなヤツいなくても、王^{オレ}は一人で起きてみせる。そもそも、

起こし方が乱暴なのだ。今朝だつていやつのゴリラナックルで起こされたのだぞ？」

「だ、誰がゴリラナックルじゃー！」

「ノー！ コーダメ！ ゴリラパワー キンジラレタチカラー！」

「何じゃ、その喋り方はあーー！」

「うがああ！ と騒ぐ心。

その姿からは、彼女がいつも心がけている“高貴”の“こ”の字もない。普通の小学生のような少女がそこにいた。

王貴も王貴で、「ゴリラはウホウホとだけ言つておれ。その方がお似合いだ」と煽る始末だ。両者とも小学生のような言い争い。

ちなみに、心にゴリラのようなパワーなどない。すべては王貴の耐久力の低さ故だ。決して、心が力強い訳ではない。

「ハア……」

ヒリカは氣だるそうに溜息を吐く。しかし、彼らが口喧嘩をしているのは何度目だろうか。恐らく、100は超えている事だろう。王貴と心の口論は益々白熱していく。

だがそれを見ても、エリカは止めない。どうのとも、彼らが本気で口論している訳ではないと分かっているからだ。

「王貴、そろそろ朝食とらないと遅刻するわよ？ 心も食べていきなさい。どうせ朝食とつてないんでしょう？」

「むう、すまぬ。それもこれもこの馬鹿のせいなのじや。いやつがもつと早く起きれば、話にならずに済むものを……」

「お前……、王のせこ^{オレ}にするのか？」

「誰がビーツ見てもお前のせいなのじやー。」

「はーはー。いいから、早く食べなさいって……」

エリカがそう言つと、一人とも渋々テーブルに座り朝食を取る。テーブルの上には、焼かれた一枚のパンが皿の上にあつた。どうやら、事前にエリカが焼いておいた物らしい。それも冷めてなく、硬くもなつていないと度いい温度だった。

王貴はそのパンにバターを塗り、ジャムを塗つて無造作に被りつく。

そして、何か思い出したかのよつて一言。

「む？ 姉上、父上達はどうした？」

「父さんは会議があるとかでモロッコに飛んだわ。母さんたちもその付き添い」

「わづか。姉上、新聞読んでないのなら王に見せよ

「はいはー」

今日の朝刊がエリカから投げられる。

それは綺麗な弧を描いて、王貴に投げ渡された。

王貴はそれを片手で受け取ると、無造作に新聞を開いた。
その見出しひには『謎の美女、謎の清掃員大活躍！』といつ文字があつた。

それを王貴は読む。要するに、川神市の住宅で強盗が入りそれを、眼帯をした赤髪の女性と清掃員の恰好をした男性が捕まえたといった記事だ。

ちゃんとその光景が写し出された写真まであり、その眼帯をした赤髪の女性の姿と清掃員の恰好をした男性の姿もある。

これでは謎でも何でもないではないか。と、王貴は片手に新聞紙を持ちもつ片方の手にパンを持ち直す。
そしてパンを一口。

「…………む

視線を感じた。

王貴はその視線の先を辿る。ナニコレたのはジト田でこいつらを睨んでいる心の姿がいた。

王貴は怪訝そうな顔つきになり、

「何だ？」

「食べているときへりへり、新聞を読むのを止めよ。だらしない」

「チツ、五月蠅い女よ。お前は王の妻にでもなつたつもりか？」

その言葉に、心はボン！ と音を立てるが如く、顔を真っ赤に染める片手に持っていたパンを一気に食べる。

ヒリカはその一人の様子を、意地の悪い顔でニヤニヤと笑つて観察していた。

それから一言。

「やう言えば、今日から学校だつて？ 王貴もこよこよ一年生かー。早いもんねー？」

「ぬ？ 今日から始業式か。ならば王^{オレ}の勝負服である“鎧”を着ねばなるまいな！ 姉上よ、王^{オレ}の鎧はどこに？」

「いーから早く食べよ、いーの馬鹿者おーー。」

心が怒号の如く声を上げる。

いーの後、王貴が心の怒りを貫つ発言をして「ココナックル（王貴命名）を顔面に食いつたのはじりでもこい話である。

「それで現在に至るといつわけだ」

「やうなのだ。じつ思ひ//サヒロ。全面的にあやつが悪いであらう？」

王貴がいるのは川神学園の2年生の教室のある廊下の窓際。

あれから何だかんだりつつも、無事（？）に川神学園に到着した。ちなみに、今この場所には心の姿はない。彼女は自分のクラスである、2年5組に行ってしまったのだ。

王貴といるのは男性。

身長は180センチメートルほどある。体つきもバランスの良い筋肉の付き方をしている。正に屈強と言えるだらう。

王貴と並んでいると大人と子供のよつたな感じに映る。

この男性の名前は“港 三千尋”。王貴と同じく、2年5組の男子生徒だ。

そして彼らが話している内容は、王貴と心の今朝起きた出来事だ。三千尋はそれを聞き終わると、一度一度頷く。

「そ、うか、大変だつたね王貴。まあ、とりあえずだ。僕は何が言いたいかと言つと……、」

「」やかに三十尋が笑つと、自分の手を首の横に当てる。
それから「」キソと、首の骨を鳴らして、

「お前の命^{タマ}ア俺に寄越せつてことだよオ……」

「な、何故怒つてゐるのだ！？」

「馬鹿野郎！不死川に殴られるつて事は、」褒美つてことだらう
がつ！ テメエは何をほざいてやがる！」

「お前に何を言つてゐる！ アレが」褒美だと！？」

「ああ、」褒美だね！ それに起つてもらつ分際で何言つてんだ！
文句言つなやこの馬鹿王。むしろ俺と変われ！ もしくは死ね！」

「ワーワー、ギャー、ギャーと。王貴と三十尋の間に争ひは益々エスカ
レートする。

その様子を通行人の川神学園の生徒はまたか。と、いうかのよ
な顔つきのまま出来るだけ触れないように、避けながら廊下を通る。

彼らが言い争いをしているのをみるのは、これで初めてというわけではないのだろう。

そういひじてこむつちに、一人の論争はますますヒートアップしていく。

「そもそも隣に住む幼馴染に起こしてもひつとか、何だよその口ゲみたいな関係は！ 僕に惚氣てんの？」

「誰が惚氣ているというか！ お前こそ……あー、何だつたか。ほれ、お前にいつもくつ付いている……」

王貴はそう言つと、何かを思ひ出すかのように顎をひねる。

「小杉？」

「そう！ そう『スギよー』お前とて、その『スギ』に起こしてもらつているらしいではないか！」

「小杉は妹みたいな感じだ！ 不死川と一緒にするなー！」

「ダ・カー・ポカ！」

「……何だよそれ？」

「^{オレ}今王がやつているエロゲだ！」

氣のせいが王貴と三千尋の口論の主点がずれていつていて、いや、これは氣のせいではないだろ。着実に、主点がずれていつていて、

このまま行けば、確実に言い争いは訳のわからないカオスなことになるだろ。と、そこには。

「おい、お前たち。一体何を騒いでいるんだ？」

一人の男子生徒が現れる。

長い紺色の長髪で後ろに髪を縛つていて、背丈は170センチメートルから175センチメートルの間くらい。体は華奢と言えるだろ。そして顔にはメガネを付けている。そのメガネはレンズが厚く、その男子生徒の目が見えないくらいの代物だ。だからだろか、誰も彼の素顔を見たことがない。曰く美少年。曰く不細工。曰く普通。数々の噂が飛び交っている。

その男子生徒の名前は“臯月 薫”。
彼もまた、2年C組の生徒。つまりは王貴と三千尋のクラスメイ
トである。

ちなみに、“霧夜王貴”“港三千尋”“臯月薰”的三名を人は
三馬鹿トリオと呼ぶ。

別に、三千尋と薰が馬鹿な行動をしているわけではない。
三千尋と呼ばれる原因はすべて王貴に原因がある。学校でエロゲ
をやつたり、いきなり学校でサバイバルゲーム大会を主催したり、
学校で缶切り大会をやつたり。

むしろ、三千尋と薰は王貴のフォローに回る立場にいる。つまり
は苦労人。

いや、三千尋は偶に王貴を放置するので、眞の苦労人は薰だけと
なっている。

「む、カオルか。おはよー！」

「ん、臯月か。おはよー」

薰の出現を見ると、王貴と三千尋が名々が挨拶をする。

薰はそれを見ると、適当に「ああ」と言葉を返すと、

「それでお前たちはどうして言い争いをしているんだ？」

「そうだ！ カオルよ、王の話を聞け。この筋肉達磨では話にもならん」

「ああ？ 誰が筋肉ダスマだつて？」

「お前以外に誰がいる。この妖怪筋肉」

王貴の暴言に、三千尋は額に青筋を浮ばせながら、

「よーし、わかつたよ。首をへし折つてあげるから、いつひちよつと来てよ」

「誰が行くものか。馬鹿かお前は！」

「三千尋も落ち着け。王貴も私の後ろに隠れないでくれるか？」

薰は後ろに隠れている王貴の襟首を掴むと、自分の前へと持つていいく。

以外と力強いやうだ。

といつのも、臥月家は武門の家柄だ。薫も相当鍛えているのだろう。

ちなみに、三千尋も道場に通っていることから、一ノト状態なのは王貴だけとなっている。

せつして薫はため息をつきながら、

「それで王貴は私に何を聞いてほしいんだ？」

「そうだ、聞けカオル！ 実はな

」

「それは王貴が悪いだろ！」

王貴が話した内容は、先ほど二千尋に話した内容。つまりは、今朝王貴に起きた出来事だ。

その話を聞いて、薰は王貴が悪いと断言する。

「なつ！ お前まで王オレが悪いと言つか！」

「起こして貰つているのに、その言い方は無いだろ？ むしろ世話を焼いてくれている不死川に感謝しろ」

薰の横で、三千尋もそう頷いた。

薰の言つ事は尤もだ。

赤の他人を朝起こしにいくなど普通はないことだ。心も好きで王貴に世話を焼いているのだろうが、それとこれとは別。王貴は心に感謝しなければならない立場にいる。

王貴は薰の発言に、顔をおもしろくなぞりつに顰める。だが薰は王貴を畳みかけるように、

「王貴、言われていてる内が花と言う奴だ。不死川の好意を受け取つ

ておけ」

王貴はその言葉を「ぐぬぬぬぬ……！」と唸りながら聞く。人の話を聞かない彼も、今回ばかりは自分が悪いと分かったようだった。

そして、彼は少し拗ねた表情で、

「……分かつた」

そう呟いた。

それからすぐに、何かを思い出すかのようにして顔を上げる。

「そうだ。おい、お前たち！ 少し聞け」

「今度は何だ？」

うんざりした表情で、薰が口を開いた。

それとは対照的に、王貴は胸を張りながら自信満々に、

「昨日“KAORU”が動画を上げたぞ！」

その言葉に、薫がピクッと体を揺らす。
別に王貴は薫の事を言つてはいるわけではない。

彼が言つ“KAORU”といつのはネットアイドルの事を言つて
いる。

某動画サイトに「姉妹で踊つてみた」というタイトルで動画を上
げたら、見事に大ブレイク。一躍ネットアイドルにまで上り詰めた
人物、それがネットアイドル“KAORU”だ。

容姿も可愛らしく、綺麗な黒曜石のような豊かな長い髪。そして
綺麗な二重の大きな瞳。何より笑顔が眩しい。
それがKAORUだ。

霧夜王貴はそんなKAORUの大ファンでもある。
さらに付け加えると、彼はオタクだ。

休日に暇さえあれば、積んでいるHロゲーをやるぐらいいオタクだ。

何はともあれ、王貴は嬉しそうに顔をほこりばせる。

「これだけで、どれだけ王貴がファンだといつ事が分かるくらい」の表情だった。

それに三千尋はニヤニヤと笑う

その表情は何か知っているかのような表情だった。

「ふーん、よかつたね。アレ？ どうしたのを毎月。凄い汗だよー？ 何があったのー？」

「い、いや。何でも無い。気にしないでくれ」

「それなら良いんだけどね。頑張ってね、か・お・る」

わざと薰の名前を強調すると、三千尋の笑みが益々増す。それと同時に薰は汗が滝のように流れ始めた。

王貴は何をしているのかと言つと、それをみて首をかしげるのみ。いつもして彼らの朝は終わった。

「……ぬ、寝ていたか」

そういうと、王貴は自分の机にうつ伏せの状態だった体を起して、寝ぼけ眼であたりを見回す。

あれから無事に川神学園の始業式が終わり、王貴は自宅へと帰ってきた。ちなみに、彼が帰ってきた時間は昼過ぎごろ。普通はそんなに早く学校が終わらないが、今日は特別だ。今日は始業式だ。始業式の日はいつも学校が終わるのだ。

さりに付け加えると、この霧夜王貴は部活も習い事も何もやっていない人種だ。三千尋や薫のように武術を習っている訳でも無い。ただのニート状態だ。

ちなみに三千尋と薫は稽古があるとかで、学校が終わると速攻で帰りの準備を済ませて下校していた。

いつもつるんでいる二人が用事があるので仕方ない。

そうなると、王貴も自分の部活動に勤しむほかない。つまりこの、帰宅部らしく下校に全力を注げるのだ。

王貴は田をこすりながら、壁にかかっていた時計に田を見やる。

時刻は20時を回っていた。

彼が最後に時計を見た時刻は14時過ぎ。つまり最低でも6時間ほど寝ていたことになる。

「不味い……これは寝すぎたか……」

彼はそう呟くと、部屋の電気を付ける。
どういうわけか、家は王貴がいないというかのように静かだ。この時間帯だと、エリカも帰ってきている筈なのにだ。

カンパニーで残業でもしているのか。と、王貴は適当に結論付けるとパソコンが置いてある机に座る。

彼がそこに座ると同時に、

「む、王貴起きたのか」

王貴の部屋のドアが開いた。

そこに王貴は視線を向ける。そこから、ひょっこりと川神学園の女子制服を着た心が顔を出した。

そこに王貴が視線を向けて、少し微妙な顔つきに変わる。
大方、朝に薰が言つていた事を思い出したのだろう。

（王^{オレ}が感謝だと？……ありがとう。といえばいいのか？ それは
それで体がかゆくなつてくるな……）

王貴はそう考へると、口元に手をやり考へ始める。
素直に、いつも起^レこしててくれてありがとう。といえばいいのに、
この男も素直ではない。

その王貴の様子を不審に思つたのか、心は何やら心配するそぶり
をしながら、

「おこ、王貴。どうしたのじや、様子が変だぞ？」

「……何でも無い。それよりも何だ？」

「うむ、先ほどHリカから連絡があつたぞ。今日は帰れないらしい。
この家にいた此方に感謝するがよいぞ！」

「お前に感謝するかはどつか別として、だ。どうして王^{オレ}の家にお前
がいるのだ？」

「……そんなものの此方の勝手なのじや」

そこは勝手じゅ黙田であつた。と、王貴は思わず口に出しかつて、
なるが、それを寸前で呑み込んだ。
それを言つたら、また口論になる。やつなるとお礼を言ひなんて
夢のまた夢だと思つたからだ。じつせりの我儘男も学習したらし
い。

「では、此方はもう帰るのじゅ」

「何だもう帰るのか?」

王貴が意外そつに声を上げた。
いつも心だったら、王貴のベッドの上に寝転がり漫画本を読み
ながら、パソコンと向かい合つてこる王貴に小言を言つのがこつもの
事だったのだ。

「ひむ、明日も早いのでな」

「やつが」

王貴はやつ一言やつひとつと、視線を心からパソコンへと向き直る。言いたいことがある。心に言いたいことがある。しかし、言葉にできない。上手く言葉を紡げない。

ただ単純に、素直にありがとひと言えばそれで終了なのだが、それすらも王貴は言えずになった。

「ではな、夜更かしはほじほじにあるのじゅう？」

心はやつひとつと、王貴の部屋のドアを睨めよひとつあるがだが、

「待て」

王貴の言葉に制止する。
心は視線を王貴の方へと向ける。

王貴は依然と、パソコンの画面から目を離さないとしている。

「その、なんだ……。また明日も王オレを起しそうことを赦す。だからま

た明日も起ひせ……」

そう王貴は口に出す。それから数秒も待たずに、王貴の顔から滝のような汗が流れ始めた。

言いたいことと違う事を言ひてからだ。王貴自身は感謝の言葉を言つたつもりだ。だが、いつの間にかいつもの如く命令口調で話していた。王貴も何を言つているの分からぬ。「じく自然に、当たり前のように命令してしまつた。

これから、いつもの如く口論になると予想を建てて、王貴は身構える。

だがしかし、

「お前に言われなくとも、それは此方の仕事ぢや。いひこち命令されることなどないのぢや」

心はどこか嬉しそうに微笑み、今度こそ部屋から出て行つた。

その行動に、王貴は不思議そうに首をひねる。

今の発言のどこに心を喜ばせる内容があつたのだらうか。自分は命令しただけだ。

訳も分からずだ。

考へても答へは出ない。今日だけは機嫌が良かつたのだらう。と、王貴は結論付けるとパソコンを操作し始める。

それからまたすぐに、扉が開いた。

そこには先ほど出て行つた心の姿が。

「ちよつと聞きたい」とあるのぢや」

「何だ?」

「お前が良く言つてこむチャットの名前は、みなとちよつと”で間違いないな?」

「間違いないが……、何だ?」

「いや、ちよつと氣になつただけ、ちや」

心はやつぱり、今度こそ出で行つた。

一体どうしたところのか。王貴は少し驚いて、

「まあ、よーか

どうでもよくなつたのか、意識をパソコンへと集中する。

今彼が開いているサイトは“みなとちやつと”といつサイトだ。チャットと書いているからには、このサイトでチャットをすることが分かる。

このサイトが何時できたのか。誰が管理しているのかは誰も知らない。いつの間にか学生のうちに広がり、誰が誰でも使用しているところが今の現状なのだ。

ちなみに王貴もこのチャットを頻繁に利用している。

さういふと“みなとちやつと”とあるが、別に三千尋が作ったサイトでも無いことをここに付け加えておく。

王貴は手馴れた操作で自分のハンドルネームである“王”をキー ボードに打つと、“入室”とあうラベルをクリックした

。。。

お知らせ・王さんが入室しました

王・こんばんわー

インパラ・オーツス

カラル・こんばんわ

ミッチーマウス・こん

王・何を話していたのだ？

ミッチーマウス・なんか、インパラの奴が相談したい事があるんだ
つてさ。

王・ほう、それはなんだ？ ^{オレ}王が答えてやるわ。

インパラ・あのよー。……えーと、何だつけ。

わざわざまで相談しようつと思つてたんだけ忘れた……。

ミッチーマウス・あるあるwww

カラル・おい

王・とりあえず、^{オレ}王の相談を聞くがよい

ミッチーマウス・お、お前も相談あんの？

王・うむ。死ぬほど自由度の高いゲームがしたい。

GTAが近いのだが、自由度が足りないのだ。何かないか？

カラル・外に出る

王…(、 、 、)

ミッチャーマウス・ちよ WWWおま WWW

インパラ・えらこばつ せつだなー おい。

カラル・だつてそうだらつ? 私はこのリアルが最も自由度が高いと想つてゐる。

ゲームではないがな。

インパラ・あ、相談したい事思い出したわ

ミッチャーマウス・聞けばじやないか

インパラ・俺の使つてゐるブライザIEなんだけどよ。これって落ちやすいのか?

王…つむ。強制終了しやすいぞ

インパラ・そうか? 強制終了なんてしたことねえぞ?

ミッチャーマウス・お前の使い方が悪いんだ

カラル・…………いや、違うだろ

王…そう言えば、お前たち朝の朝刊を見たか?

ミッチャーマウス・どうしたんだ?

カヲル・もしかして、謎の美少女と謎の清掃員のやつか？

王・そうだ。まったく、なにが謎だ。

しつかり、顔写真も撮っていたのだぞ？

謎でも何でもないではないか。

インバラ・あー、それ俺だわ

王・はっはっは。インバラよ馬鹿も休み休み言うのだな。

まあ、ネットで見えを張りたいという気持ちは分からんでも無いが

インバラ・だからそれ俺だつて

おしゃらせ・口口さんが入室しました

口口口・こんばんはー

王・うむ、余り見ない顔だな。ゆっくりしていってね！

ミッチャーマウス・こんばんわ

カヲル・こんばんわー

インバラ・チーツ

口口口・突然なのですが、ちょっと相談に乗つて欲しい事がある

んです。

王：本当に突然だが、まあいい。聞こつじやないか。

「ロロロロ・私の幼馴染が「王は」一次元にしか興味がない！」
と言つて、私に振り向いてくれないんです。どうしたら
いいですか？

インパラ：何か食べ物やつたらいいんじやね？

カラル：誠心誠意をもつて接して行けばよいのでは？

王・王の物になれ！ この一言で全て片がつく！

ミッチャーマウス・つ既成事実

「つむ、相談を受けるといつのは気分が良いな！」

王貴がチャットをしながらつり発言する。

その表情は笑顔の一文字。仕事をしたとでもいうかのよつた顔つきであった。

それから、數十分後。

ウサギのプリントが施されているパジャマを着た心が王貴の部屋へと乗り込み、彼の顔面に掛けて渾身の一撃。ようするに、崩拳を

繰り出したのは極めて珍しい話である

。

我儘男の実態（前書き）

「Jの男は跳び級です

我儘男の実態

霧夜王貴

チャットHN：王

身長：163cm

体重：50kg

血液型：AB

誕生日：12月24日

一人称：王^{オレ}

あだ名：馬鹿王

武器：パソコン

職業：川神学園2年C組

家庭：義母、実母、実父共に健在。異母姉が一人

好きな食べ物：チョコレート

嫌いな食べ物：とにかく辛いもの。

川神水（とある人物に一気飲みさせられ大変な目にあつた）

趣味：チャット、二次元

特技：あだち充ヒロインの名前をすべて言える

大切なモノ：パソコン

苦手なもの：芸術

尊敬する人：少佐 シャーク

川神学園での成績 五段階評価

現国：2

古典：2

数学：3

保	體	美	英	物	科
：	：	術	語	理	學
2	1	4	3	2	3

世界史（選択）
：

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7637q/>

コラボ企画 真剣で私に恋しなさい ~ 男 ~

2011年4月8日14時45分発行